



## 日本植物病理学会ニュース 第39号

(2007年8月)

### 【名誉会員・永年会員のご略歴とお話】

名誉会員 松山宣明



昭和11年7月宮城県に生まれる。仙台第二高等学校卒、東北大学農学部、同大学院農学研究科修士、博士課程修了、農学博士、東北大学農学部助手を経て昭和41年10月、当時東京都北区西ヶ原にあった農林省農業技術研究所病理昆虫部糸状菌病第二研究室へ転出した。昭和46年10月から

翌年9月までの一年間科学技術庁長期在外研究員（総理府技官）として米国コネチカット州立農業試験場へ一年間留学し、故 Dr. A. E. Dimond らに師事した。帰国後、昭和51年3月九州大学助教授として転出、平成3年に教授に昇任、平成12年3月までの約25年間同大学に奉職した。平成12年3月同大学を停年により退職後、同年4月から東京農業大学教授（嘱託）として7年間勤務し本年3月停年退職した。この間、植物増生病や減生病の感染生理学的研究、病原糸状菌の形態形成、抗生物質産生菌探索と活性物質の単離・精製、植物病原糸状菌の簡易同定法開発、アミノ脂質を指標とした植物病原細菌の TLC による簡易同定法の実用化を行なって来た。平成3年「イネの諸病害特にいもち病に関する菌学的、病理化学的基礎研究」で植物病理学会賞を受賞、平成10年同学会会長に就任した。また、学会報編集幹事長を4年間務めたほか、学会ニュース編集委員長を7年間務め今春退任した。これらの学会との関わりの中で特に印象深い活動としては、第一回教育プログラムの東京農業大学での開催（平成16年8月）である。当初はこの種のイベントがはたして成功するかどうか大変不安であったが、予想外の好評ぶりに驚き、喜び、凶に乗って定員の2倍の40名の参加者を受け入れてしまった。当時の学会長米山勝美（明治大）教授、前年の学会長

小島 誠（新潟大）教授、プログラム推進委員会委員、講師の皆様方、学会事務局および東京農大スタッフの協力と学生達の献身的協力があってこそその成功であったと考え。記して心から感謝申し上げる。さて、昭和34年日本植物病理学会に入会してから約48年が経過した。これまで公私に涉ってお世話になった方々は数限りなく、全ての方々のお名前を挙げることは無理であるが、大学時代の恩師 故田杉平司、故三澤正生、山中 達、吉田孝二の諸先生、農水省農業技術研究所の故岩田吉人部長、故水上武幸部長、故高坂 爾室長、故山口富夫室長ほか病理昆虫部の諸先輩、同僚、後輩の皆様方、25年間勤めた九州大学時代の脇本 哲教授、佐賀大学の野中福次教授、東京農業大学の丹田誠之助教授、陶山一雄教授、根岸寛光准教授に心からの感謝を申し上げます。そして、長年心の拠り所であった日本植物病理学会に感謝し益々のご発展を祈念する次第である。

名誉会員 生越 明



昭和12年1月島根県で出生。昭和34年北海道大学農学部農業生物学科卒業。昭和36年同修士課程を修了。同年北海道大学農学部助手。昭和41年農林省農業技術研究所病理昆虫部農林技官。昭和50年「*Rhizoctonia solani* Kuehn の菌糸融合による類別と各群の完全世代に関する研究」により北海道大学から農学博士を授与された。昭和51年北海道大学農学部助教授、昭和58年同大学教授。昭和59年「*Rhizoctonia* 属菌の分類学的研究」により日本植物病理学会賞を受賞した。平成元年北海道大学農学部附属植物園園長。平成7年北海道大学農学部長。平成12年同大学停年退官。名誉教授となる。同年北海道澱粉工業協会参与となり、平成18年退任

した。大学院時代から、土壤伝染性病害の研究に従事。特に、*Rhizoctonia* の分類学的研究に取り組み、菌糸融合現象を分類・類別に取り入れることで、複雑な *Rhizoctonia* 属菌を簡便に取り扱うことができることを示した。この研究の成果は、「Identification of *Rhizoctonia* Species」(共著)に集大成された。昭和 61 年頃から、世界的に新しい系統が出現して大問題になっていたジャガイモ疫病菌の研究を開始し、わが国の疫病菌が新しい系統に置き換わっていることを明らかにした。さらにアジア諸国の研究者とチームを作り、アジアの疫病菌を研究した。学会では、日本植物病理学会評議員、北海道部会長、学会長、国際植物病理学会土壤伝染性病害委員会委員、日本菌学会評議員、土壤微生物研究会会長を務めた。平成元年に北海道の産官学が共同で結成した、「北海道農業フロンティア研究会」の副会長、会長を務めた。平成 9 年「第 4 回国際植物生長促進性根圏細菌 (PGPR) に関するワークショップ」を主催し、また、平成 16 年「ジャガイモそうか病に関する国際シンポジウム」開催に参画した。近年個々の研究者によるアジア諸国の研究者との交流が進んでいるが、まだまだ不十分と考えられる。アジア植物病理学会議が開催されるようになったこともあり、学会としてもっとアジア諸国との交流を推進されることを願うものである。

#### 永年会員 舟山廣治



昭和 6 年 7 月北海道に生まれる。昭和 25 年 3 月北海道立永山(現旭川)農業高等学校農科卒業。同年 4 月農林省北海道農業試験場作物部普通作物第 4 研究室(馬鈴薯の品種改良を主とする)に勤めた。当時、馬鈴薯栽培上大きな問題となっていたジャガイモ輪腐病の根絶のため、研究供試種いもはすべてグ

ラム染色検鏡検査して植付していた。この作業を通じて初めて農作物の細菌病を知り興味を持った。同年 12 月、北海道立農業試験場琴似本場(現中央農試)病虫部に移った。成田武四部長のもとで研究補助をつとめ、ジャガイモ細菌病、タマネギ細菌病、ジャガイモ粉状そうか病などについて試験研究に当たった。この中で、昭和 29 年学会北海道部会において、タマネギ軟腐病の病原細菌について発表した。これはわたくしの学会発表の最初であった。

昭和 30 年 7 月北海道立上川農業試験場に移った。ここでは病害虫の発生予察の業務とジャガイモ青枯病、イネ菌

核病などについて取り組み、成果は学会その他で発表した。青枯病で印象深いことは、昭和 31 年寒冷の地北海道北部の宗谷支庁管内中頓別町で発生していることを確認したことで、これは本病のわが国における発生の北限地と言える。

上川農業試験場は農業の現場に近接していることもあり様々な病害の標本が持ち込まれ、その中にイネの葉鞘褐変現象があった。昭和 37 年、これが細菌による病害であることを明らかにし、病名はイネ葉鞘褐変病として学会に発表した。これにより以降の本病研究の端緒をつけたと思う。この頃、段々に集まった植物細菌病に関する文献を整理し、昭和 46 年、日本植物病原細菌目録を出版した。この中にはわが国における植物細菌病の研究推移を農業史的に通覧した 1 編もおさめた。

その後、わたくしは北海道道政の場に移り、昭和 50 年 4 月以降北海道議会議員を 6 期 24 年間務めた。その間農業、文化問題に力をそそぎ北海道立文書館、北海道立文学館の開設につくした。現在は北海道文化財保護協会会長、財団法人北海道北方博物館交流協会理事長を務めている。

#### 永年会員 濱屋悦次



1929 年 12 月東京都に生まれる。1957 年 3 月東京大学農学部農学科卒。同年 4 月農林省中国農業試験場に採用。1962 年 6 月農事試験場に配置換。1975 年 7 月～1977 年 9 月熱帯農業研究センター併任。1975 年 7 月～1977 年 8 月スリランカ社会主義共和国へ長期出張。1978 年 4 月茶業試験場に配置換。

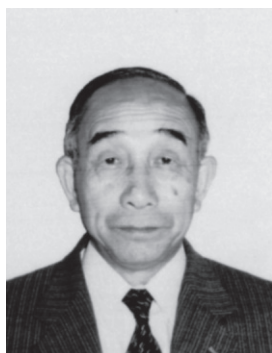
1984 年 10 月農業環境技術研究所に配置換。1986 年 4 月～1988 年 3 月日本植物病理学会庶務幹事長。1986 年 10 月～1989 年 3 月東京大学農学部講師併任。1988 年 2 月科学技術会議専門委員任命(組換え DNA 分科会担当)。1989 年 7 月農林水産省退職。

中国農業試験場では、主としてイネいもち病防除に関する研究に従事したが、在勤最後のころにはイネ葉鞘枯病の幼苗検定法の開発にも力を注いだ。農事試験場では、組織培養法によるウイルス罹病植物の無毒化という大課題と取り組み、鋭意努力の結果、多くの植物についての無毒化に成功し、実用的な技術として確立することができた。それが評価されて、1975 年 3 月東京大学より農学博士の学位を授与され、1987 年 4 月には日本植物病理学会賞をいただいた。茶業試験場では、チャ炭疽病菌の毛茸感染を見出

したり、多発しているチャ輪斑病の病原菌を特定し、その発生生態を明らかにするなど、いくつかの新知見を得ている。また、ツバキ葉から特殊な抗菌性成分（カメリジン）を分離し、構造式を決定した。農業環境技術研究所では、パーソナル・コンピュータを用い、有用植物の全登録糸状菌病についてデータベースを作成し、糸状菌病診断システムの構築を試みるなど、新しい研究技法の開拓に努めた。

農林水産省退職以降は、『応用植物病理学用語集』の編者が、ほとんど唯一の植物病理学に直接関わる仕事である。しかし、植物病理学を忘れたわけではない。最近上梓した雑文に、「縄文時代の中期、人々の主食源であったクリが壊滅状態になったのは、クリ胴枯病の大発生が原因である」との新仮説を私見として述べた。いつの日にか、この仮説が証明されることを切に願っている。

#### 永年会員 香川 寛



大正 15 年 10 月宮城県に生まれる。昭和 27 年 3 月北海道大学農学部農業生物学科卒業、同年 4 月弘前大学文理学部農学科助手に採用、昭和 30 年 7 月農学部昇格に伴い植物保護学講座に転属。昭和 37 年 2 月青森県農業試験場栽培部病理昆虫科長に転勤。昭和 46 年 6 月同試験場古間木支場長に転勤。昭和

47 年 4 月同支場の機構改革により青森県畑作園芸試験場次長兼園芸部長に配置換え、昭和 48 年 4 月青森県農業試験場環境部長に配置換え、昭和 49 年 5 月同場次長兼環境部長に、昭和 50 年 4 月次長兼研究管理室長に配置換え、昭和 56 年 4 月青森県農業大学校長に配置換え、昭和 58 年 4 月青森県農業試験場長に配置換え、昭和 60 年 3 月同場を退職。同年 5 月青森県植物防疫協会事務局長に採用、昭和 61 年 4 月同協会が社団法人に認可される。平成 6 年 3 月同協会を退職。この間昭和 27 年から現在まで日本植物病理学会会員、昭和 55～56 年に同学会東北地区評議員、昭和 55 年に同学会東北部会長を務めた。昭和 59 年に北日本病害虫研究会長に選任された。平成 11 年に財団法人報農会から功労賞を受賞。業績等については摘記して紹介したい。リンゴ病害の防除（弘前大農）；リンゴ実腐病に対し人工授粉と薬剤を併用して効果を検討した結果、抗生物質のグリセオフルビン剤の著効を認めた（昭和 31～36）。寒冷地における水稲病害の防除（青森農試）；いもち病の発生子察のためイネ葉鞘裏面細胞接種法を利用し圃場

発生の約 1 週間前に予測し得ることを認めた（昭和 37～45）。畑苗代における水稲苗立枯病防除にイソキサゾール剤の卓効を認めた（昭和 43～45）。青森県におけるいもち病、紋枯病、ニカメイガの同時防除の実用性を認め混合散布の普及に努めた（昭和 37～41）。水稲奨励品種及び優良系統のいもち病耐病性の検定と育成段階での早期苗選抜の実施（昭和 41～45）。畑作物生産の安定（青森農試、同古間木支場）；テンサイ葉腐病、根腐病、苗立枯病の薬剤防除の検討と防除法の普及に努めた（昭和 37～42）。県植物防疫員として検疫に従事し優良種苗の生産を進めた（昭和 37～45）。ナタネの系統適応性試験を古間木支場（青森県畑園試）に移転整備した（昭和 46～47）。その他の植物防疫関係では（青森農試、青森植防協）青森県農作物病害虫等防除基準の編集と発刊（昭和 37～45、昭和 60～平成 5）。青森県病害虫防除所の統合整備への協力（昭和 48～49）。青森県植物防疫協会の法人化と事業推進体制の整備に努めた（昭和 60～61）。

#### 永年会員 木村郁夫



昭和 6 年 5 月滋賀県生まれ。昭和 31 年 3 月北海道大学農学部農業生物学科卒業。昭和 36 年 3 月同大学大学院農学研究科博士課程を修了し農学博士の学位を得る。昭和 36 年 4 月同大学農学部植物ウイルス病学・菌学講座助手に採用される。昭和 37 年 6 月農林省農業技術研究所病理昆虫部に転任。

昭和 41 年 7 月同省植物ウイルス研究所に転任。昭和 43 年 7 月～同 45 年 12 月まで、米国イリノイ州立大学生命科学部に出張。昭和 58 年 1 月植物ウイルス研究所伝染研究室長に配置換え。同年 12 月農水省農業生物資源研究所細胞生理研究室長に配置換え。平成 2 年 4 月北海道大学植物ウイルス病学・菌学講座教授に転任。平成 7 年 3 月北海道大学（農学部）を停年退官。

研究：北海道大学大学院では恩師福士貞吉教授のもと、イネ萎縮ウイルス（RDV）の媒介虫にウイルス液を注射する方法で媒介虫を保毒させることに成功した。これにより、RDV 感染力を試す実験系が初めて完成した。また、四方英四郎先生は RDV 感染葉汁液分画を電子顕微鏡で観察して特異的粒子を発見した。この同分画を媒介虫に注射したところ、感染が認められ、この特異的粒子が RDV 本体であることが分かった。農業技術研究所では鈴木直治室長の



もと、RDV 純化法を確立して、ウイルスの諸性質を明らかにした。昭和43年7月から2年4ヶ月間、米国イリノイ州立大学で、L. M. Black 教授のもと、クローバーウイルスの媒介ヨコバイの細胞培養技術を習得してきた。帰国後、RDV の媒介ヨコバイ類の培養細胞株を確立した。そして、この培養細胞に RDV を感染させることに成功した。本法は前述の媒介虫注射法に比べて、ウイルス濃度で1/100倍鋭敏で、実験期間で1/30(2日以内)に短縮させる画期的な方法である。以上により、昭和61年に科学技術庁長官賞、平成元年に日本植物病理学会賞を受賞した。その後、引き続きウンカ類の培養細胞株を得ようと努力している。学会活動は北海道で、評議員や部会長などを務めました。終わりに、本学会の益々の発展と会員皆様のご健闘をお祈り致します。

#### 永年会員 駒田 旦



昭和6(1931)年8月三重県津市に生まれる。

1956年三重大学農学部農学科〈植物病理学専攻〉卒業。

同年4月農林省入省。東海近畿農業試験場に配属。'73年同場廃場に伴い野菜試験場に異動。この間、'75年8月~'76年8月、科学技術庁パートギャランテイ在外研究員として、米

国ミシガン州立大学に勤務。'76年10月農事試験場に異動。同場のつくば移転('81年)に伴い、農業研究センターに異動。農業環境技術研究所('88~89年)を最後に、33年間の国立試験研究機関の研究員「官」の生活を終えた。'89年10月文部省に出向。島根大学農学部教授として教壇に立ち「学」、'95年3月定年退官。この間終始、野菜・花きのフザリウム病、パーテイシリウム病、またアブラナ科野菜根こぶ病など土壌伝染病を対象として、フザリウム病抑止土壌研究に代表される発生生態、非病原性フザリウム菌による野菜フザリウム病防除に代表される生物防除、ハクサイ根こぶ病・黄化病総合防除支援システム構築に代表される総合防除、駒田培地の創製に代表されるフザリウム菌検出定量法などの先導的研究を行った。これらの研究に対しては、'75年、大阪府立大学から農学博士の学位が授与された。さらに'84年、日本植物病理学会賞と科学技術庁長官賞、'88年、農林水産大臣賞、2001年、日本農業研究所賞が授与された。

退官後、'95年7月から、滋賀県湖南市〈現〉のタキイ

種苗〈株〉研究農場で研究顧問として、'06年3月まで勤務「産」して、退職。この間、抵抗性品種の育成のほか、国際的な種子健全性推進組織の活動を通じて、我が国の野菜・花き種子の健全性向上に寄与した。さらに2000年代に入り相次いで起きた、食品の安全性に関わる不幸な事件をきっかけに急遽実施された、厳しい農薬使用規制により事実上適用不能となった種子消毒農薬の登録条件の拡大に関して、種苗業界、農薬業界、農林水産当局の間の橋渡しの活動を通じて、種苗業界の当面の危機を救ったのみならず農薬行政・種苗行政に対しても、少なからぬ貢献をしたと自負している。

#### 永年会員 太田舜三



昭和6年12月静岡県に生まれる。東京農工大学農学部農学科を昭和29年3月に卒業。専攻した植物病理学教室に研究生として在学、地元就職を希望し東海近畿農業試験場園芸部(興津)の田中彰一郎長に相談したところ、静岡市所在の農薬企業が病理の専攻者を求めているとの斡旋を得る。昭和30年5月

トモノ農薬に入社し、田中部長のご配慮で1年間興津の病害研究室に特研究生として内地留学。研究室では北島博、山田峻一両博士のご指導を受け、果樹病害の診断・防除法などの習得に加えて、ウイルス病を含むカンキツ及び落葉果樹等の重要病害の室内、苗木、圃場並びに現地実証試験まで多岐にわたって接することができた。

入社以来、約35年主に研究開発業務に従事し、果樹農薬の開発と普及にあたった。平成2年1月、ゴルフ場分野の研究開発型企業として事業を展開していたトモノグリーン・ケミカル社(昭和49年トモノ社より独立して発足)に転じ、ゴルフ場の芝生の根圏の水管理技術は健全な生育をもたらし、土壌病害の回避に役立つと海外先進水管理技術の推進と適正な農薬使用の啓蒙に努め、常務・参与を経て平成19年1月退社。

顧みれば、学生の頃母校にて関東部会が開催の折、先輩の誘いにより入会したと記憶している。これまで見るべきものをあげるには至らなかったが、現場が抱える問題の解決の手掛かりはないかを念頭に席をけがしてきた。このたびの永年会員のご推挙には身に余る榮譽と感謝いたします。学会の益々の発展をお祈り申し上げます。

## 永年会員 角名郁郎



昭和7年3月31日、滋賀県に生まれ、昭和31年(1956)京都大学農学部農林生物学科(植物病理学専攻)を卒業し、農薬の第一号社員として武田薬品工業株式会社に入社、研究所京都試験農園に配属された。業務は一年を通じてイネいもち病、紋枯病などの試験ができる農薬の試験体制づくりにあり、

ゼロからのスタートであった。

初めにいもち病の試験体制を確立し、多数の合成化合物、抗生物質などの試験を実施した。その成果として $\beta$ -アシルフエニルヒドラジン誘導体を見出したが、この化合物は製剤化が難しく、イネ体上に結晶が析出するなど安定した防除効果が得られなかった。しかし、1968年にこれらの内容を取りまとめて京都大学より農学博士の学位を受けた(農業用殺菌剤の試験方法ならびに効果に関する研究とくにイネいもち病防除薬剤について)。また、紋枯病の一次試験について、当時の研究ではイネの幼苗を用いる試験は適切でないと言われており、ソラマメ法が一般的であった。しかし一方で、幼苗、分蘗期などのイネを供試して試験法の検討を行ったが、この方法が後にバリダマイシン発見へとつながった。さらに、大麦ウドンコ病を幼苗上で発病させて、試験管内で行う幼苗検定法をつくり、合成化合物などのスクリーニングをスタートさせたが、この体制が後にミルデイオマイシンを生み出すこととなった。

1969年に営業部門(主任、課長)、1974年にまた研究所に戻り(研究調査役)、その間工業用殺菌剤ジエチルクロロフマーレート、ハログノチオフェンジオキシドの研究開発・製品化を進めた。とくに後者は「化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律」による登録に手数と時間がかかった。また、大型の工業用殺菌剤3-イソチアズロン化合物が変異原性陽性となり検討した。これが後(1987)にRohm & Haas Co. (米国)での「Current Industrial Biocides Market in Japan」と題する講演となった。1989年に農薬部門より環境資材本部に代わり(調査役)、1991年に近畿大学非常勤講師となり、翌年に武田薬品、2003年に近大を定年退職した。なお、主要病原菌の遺伝子解析が進むことを期待しています。

要望：主要病原菌の遺伝子解析を積極的に進めて欲しいと考えます。病原性の強弱や違いは、遺伝子内の塩基配列の微妙な差が影響しているのではなからうか。塩基配列を

調査すると、遺伝子の発現には影響しないレベルで塩基の違いがあります。また、病原菌のミトコンドリアのDNA解析も病原性と何らかの関係が見られるのではないかと考えます。

## 永年会員 田中 寛



昭和6年9月大阪府に生まれる。昭和31年3月大阪府立大学農学部農学科卒業。同年4月大阪府立大学農学部植物病理学講座助手補、同33年助手として勤務。昭和39年大阪府農林技術センター調査部に転任(技師)。昭和50年同栽培部主任研究員、総括研究員、病虫科長、栽培部長を経て同62年5月大阪府農林技術センター所長に就任。平成2年4月同農業

大学校長(非常勤)、同7年4月同農業大学校非常勤講師、同14年4月大阪府立食とみどりの総合技術センター農業大学校非常勤講師、同19年4月大阪府環境農林水産総合研究所に名称変更。同農業大学校非常勤講師として現在に至る。日本植物病理学会評議員(昭和60、平成8、9年度)、関西病虫害研究会会長(昭和63～平成元年)。主たる研究略歴は、大阪府立大学では、昭和30年をピークに泉州地域の玉葱に大激発した露菌病に対し、研究室全員で防除の研究に当たった。昭和29年頃に府下のナスに多発した半身萎凋病の病原菌とその生理生態などの研究成果を昭和31年度大阪府立大学農学部紀要に発表した。昭和37年～38年度に農林水産技術会議特別研究「土壌病原菌 *Pythium* 菌の分類同定」および文部科学研究費「植物ウイルスの分類学的研究」の共同研究に参加し、諸先生のご指導の下研究に当たった。昭和39年以降大阪府農林技術センターでは、病害虫発生予察に従事するとともに、現場で問題になっている病害の防除法の研究と成果の普及に努めた。アブラムシ伝搬性の野菜類ウイルス病に対し、光反射マルチ資材の利用が防除効果が高く、栽培上の利点も認められ実用化技術として評価され、農林技術協会から昭和63年度農業技術功労者賞を授与された。ナス半身萎凋病については、病原菌の同定、発生生態および生物的防除法の研究を行った。これらの成果に対し平成8年、大阪府立大学から農学博士を授与された。昭和53年頃から府下のキャベツ産地で多発した根こぶ病に対し、現地防除試験を行い、有効な総合防除法を立て普及に努めた。以上の永年にわたり試験研究を続けてこられたのも諸先生初め諸兄の皆様方の暖かい



ご指導とご協力の賜と深く感謝申し上げます。

永年会員 上杉康彦



昭和5年10月大阪府で出生。昭和28年3月東京大学（旧制）農学部農芸化学科（生物化学専攻）卒業。同年4月農林省に入省、京都農地事務局勤務後、昭和30年5月農業技術研究所病理昆虫部農薬科農薬物理化学研究室に転勤して農薬の製剤、施用法、物理化学性と生物活性などの試験・研究を行った。昭和

38年5月に新設の理化学研究所農薬研究室の最初の要員として出向し、研究施設の立案に携わった。昭和41年7月に農業技術研究所農薬科に復帰し、農薬化学第二研究室長として作物病害防除担当となった。同年11月農学博士。昭和58年1月農薬科長。同62年1月退官、同年4月に宇部興産株式会社に入社、農薬研究部長を勤めたのち平成7年12月に退職した。上記の間、本学会の編集委員、評議員などを歴任した。

海外開発農薬を導入した時代から、農薬の国内開発が奏功し、その低毒性の新規農薬から派生する問題が課題である現代まで、各時代の課題に関わり幸いであった。低毒性新規農薬の実用面では基礎知識として応用薬理が重要と考え、研究手段として病原菌の薬剤耐性変異菌株を研究室内で獲得して研究開始後まもなく、昭和46年に山形県でカスガマイシン耐性イネいもち病菌が圃場出現し、同年にオランダでもベンゾイミダゾール剤耐性灰色かび病菌が発生し、以後、薬剤耐性菌そのものが現場での重要課題となってそれに忙殺されることとなった。

民間に転職後、北興化学、宇部興産の両社共同によるDMI系イネばか苗病防除剤ペフラゾエートの開発に関わったが、その実用化後15年以上、DMI剤耐性はイネばか苗病菌では問題となっていない。ペフラゾエートの抗菌力はむしろ低くて適用病害の範囲も限定的であり、DMI剤の作用性から考えてイネばか苗病菌の病原毒素ジベレリン生成の選択的阻害も作用機構である可能性がある。この点が未検討であったと今になって気付いている。ともあれ、研究生活最終段階で薬剤耐性菌対策のささやかな実例を示すことができ嬉しく思っている。そして、本学会が扱うような生物系応用科学は生物現象探究の良いアプローチであったと痛感し、感謝している。

永年会員 米山伸吾



1931年11月25日まだまだ田園が豊かであった東京で生まれた。千葉大学・河村貞之助先生のもとで植物病学を学び、（財）日本園芸研究所を経て、コメから園芸への転換期の茨城園試に採用された。その当時は出勤すると発病株を持った普及員、農家が待っていたことは度々で病理の基本、観察一写真記録一分

離一接種一再分離を忠実にやり、その経験が、退職後に大いに役立つことなど夢想だにしなかった。当初の研究課題チューリップの球根腐敗病では、球根生産から促成栽培に至る間の発生生態と、その間の一貫した防除法を開発し、現在でもこの処理により、本病はほとんど発病していない。キュウリは産地が移動したほどつる割病が激発しており、蔬菜部と協同で夏型キュウリに低温伸長性を付与すると共に、つる割病の防除に有効なカボチャ台木の選抜を行った。この時の「発病回避機構に関する研究」で1974年に東京農大より学位を授与された。それから30数年後の現在も、キュウリはカボチャに接木されて、つる割病を回避しつつ安定的に栽培されている。1968年春普及員から異様なモザイク症状のスイカが持ち込まれ、一見して従来のもとは異なると直感し、これが千葉県とともに初発生した新病害CGMMV-スイカ系で、日常の観察の重要性を認識した。チューリップ、キュウリの研究により1979年に、野菜病害研究で1989年に、と2回も知事表彰を受けた。現職時代は専ら現場対応の実学に徹して、学問的な研究成果がなく恥じ入る次第である。農試に異動し農水省畑作物害虫の指定試験主任を併任した。

学会では病名目録第2巻（野菜、草花）第2版の編集委員、1988年京都で行われた第5回国際植物病理学会議で、普及セクションのお手伝いをしたに過ぎない。

退職後は1992～3、2000年の2回、JICAの専門家としてブラジル・アマゾン湿潤熱帯農牧研究公社で、多くの研究者が関与したコショウのフザリウム病と熱帯果樹クパスの天狗巢病の共同研究に携わった。また1988、1998年の2回、スリランカでタマネギ、ココヤムの土壌病害の初発生を記録し防除方法を明らかにした。多くの諸先輩方のご好意によりいくつかの技術書に分担執筆の機会を与えられたことを感謝し、お礼を申し上げます。

最近の基礎研究の進展は著しいが、防除に対する位置づけを念頭に置き研究して欲しい。同時に病害の防除を待ち望む現場のため、泥臭い防除法の更なる開発を希望します。

## 【会員の動静】

## 1. 人事

## (1) 大学関係

内藤繁男 H19. 3 北海道大学大学院 農学研究  
院 植物病理学研究室 教授  
退職

古屋廣光 H19. 4 秋田県立大学 生物資源科学  
部 植物保護学分野 教授

藤 晋一 H19. 4 秋田県立大学 生物資源科学  
部 植物保護学分野 准教授

西川尚志 H18.10 宇都宮大学 遺伝子実験施設  
助手

堀江博道 H19. 4 東京大学大学院 農学生命科学  
研究科 植物医科学研究室  
教授

大島研郎 H18.10 東京大学大学院 農学生命科学  
研究科 植物医科学研究室  
助手

篠原弘亮 H19. 4 東京農業大学 農学部 植物  
病理学研究室 准教授

平田久笑 H19. 4 静岡大学 農学部 助教

露無慎二 H19. 4 静岡大学副学長（国際戦略担  
当）（併 静岡大学創造科学  
技術大学院 教授）

川北一人 H18. 6 名古屋大学大学院 生命農学  
研究科 植物病理学研究分野  
教授

竹本大吾 H19. 5 名古屋大学大学院 生命農学  
研究科 植物病理学研究分野  
助教

佐藤幸生 H19. 4 富山県立大学 工学部 教養  
教育（生物学） 教授

加藤久晴 H19. 4 福井県立大学 生物資源学  
部 分子生物学領域 准教授

東條元昭 H18. 4 大阪府立大学 生命環境科学  
研究科 植物遺伝子科学講座  
准教授

児玉基一郎 H19. 7 鳥取大学 農学部 植物病理  
学研究室 教授

高浪洋一 H19. 3 九州大学大学院 農学研究院  
植物病理学分野 教授（退職）

土屋健一 H19. 6 九州大学大学院 農学研究院  
植物病理学分野 教授

吉田政博 H19. 4 九州東海大学 農学部 植物  
病理学研究室 教授

菅野善明 H19. 4 南九州大学 園芸学部 園芸  
学科 園芸植物病理研究室  
准教授

田場 聡 H19. 5 琉球大学 農学部 生物生産  
学科 熱帯植物生産学講座  
植物病理学研究室 准教授

## (2) 農水省関連独法関係

小川 奎 H19. 4 日本植物調節剤研究協会 会  
長 [農業・食品産業技術総合  
研究機構 理事]

山口 勇 H19. 4 農林水産消費安全技術セン  
ター 理事長 [農薬検査所  
理事長]

塩見敏樹 H19. 3 退職 [農環研 研究コーデ  
ィネータ兼生物生態機能研究領  
域 領域長]

秋田 滋 H19. 3 退職 [果樹研 果樹病害研究  
チーム（口之津）上席研]

仙北俊弘 H19. 4 国際農研 理事 [国際農研  
熱帯・島嶼研究拠点 所長]

山下 博 H19. 4 那覇植物防疫事務所 所長  
[神戸植物防疫所 業務部  
統括植物検疫官]

横山和成 H19. 4 中央農研 生産支援システム  
研究チーム長 [北海道農研  
根圏域研究チーム 上席研]

加藤雅康 H19. 4 中央農研 大豆生産安定研究  
チーム 上席研 [国際農研  
生物資源領域 主研]

笹谷孝英 H19. 4 中央農研 昆虫等媒介病害研  
究チーム 主研 [技会 研究  
調査官]

篠原 信 H19. 4 野茶研 野菜IPM 研究チーム  
研究員（安濃）[野茶研 野  
菜IPM 研究チーム 研究員  
（武豊）]

宮坂 篤 H19. 4 九州沖縄農研 赤かび病研究  
チーム 上席研 [中央農研  
企画管理部 企画チーム長]

岡部郁子	H19. 4	畜草研 飼料作物環境研究チーム 主研 [農環研 生物生態機能研究領域 主研]	赤坂安盛	H19. 4	岩手県農業研究センター 病害虫部長 (兼病害虫防除所長)
對馬誠也	H19. 4	農環研 生物生態機能研究領域 領域長 [農環研 生物生態機能研究領域 上席研]	富永朋之	H19. 4	岩手県宮古農業改良普及センター 主任農業普及員
堀田光生	H19. 4	農環研 生物生態機能研究領域 主研 [北海道農研 北海道畑輪作研究チーム 主研]	鈴木繁実	H19. 3	退職 [岩手県農業研究センター]
大久保博人	H19. 4	国際農研 生物資源領域 主研 [畜草研 飼料作物環境研究チーム 主研]	瀬尾直美	H19. 4	宮城県農林水産部 農産園芸環境課 技術主査
河邊邦正	H19. 4	国際農研 企画調整部 主研 [国際農研 熱帯・島嶼研究拠点 主研]	辻 英明	H19. 4	宮城県古川農業試験場 作物保護部 主任研究員
篠原弘亮	H19. 4	東京農業大学 農学部 植物病理学研究室 准教授 [東北農研 寒冷地野菜花き研究チーム (福島) 主研]	門間陽一	H19. 4	宮城県農林水産部 農林水産経営支援課 技術主査
増中 章	H19. 4	任期付採用 北海道農研 根圏域研究チーム	菅野博英	H19. 4	宮城県農林水産部 農産園芸環境課 技術主査
鬼頭英樹	H19. 4	任期付採用 東北農研 病害抵抗性研究チーム	今関美菜子	H19. 4	宮城県亘理農業改良普及センター 技術主査
(3) 都道府県試験研究機関関係			竹田富一	H19. 4	山形県病害虫防除所 所長
桑田博隆	H19. 4	青森県農林総合研究センター 次長	加藤智弘	H19. 4	山形県村山総合支庁 産業経済部 北村山農業技術普及課 課長補佐
對馬由起子	H19. 4	青森県農林総合研究センター グリーンバイオセンター 技師	卯月恒安	H19. 4	山形県農林水産部 エコ農業推進課 エコ農業推進専門員
及川 健	H19. 4	青森県農林総合研究センター 畑作園芸試験場 主幹	早坂 剛	H19. 4	山形県農林水産部 生産技術課 稲作農産専門員
福士好文	H19. 4	青森県農林総合研究センター りんご試験場 研究管理員	芳賀紀之	H19. 4	福島県農業総合センター 会津地域研究所 研究員
山本晋玄	H19. 4	青森県農林総合研究センター りんご試験場 技師	河又 仁	H19. 4	茨城県農業総合センター 生物工学研究所 生物防除研究室 室長
忠 英一	H19. 4	青森県農林総合研究センター フラワーセンター21 あおもり 研究管理員	富田恭範	H19. 4	茨城県農業総合センター 園芸研究所 病虫研究室 室長
仲谷房治	H19. 4	岩手県中央農業改良普及センター 所長	小河原孝司	H19. 4	茨城県農業総合センター 園芸研究所 病虫研究室 主任研究員
武田眞一	H19. 4	岩手県農業研究センター 副所長	宮本拓也	H19. 4	茨城県農業総合センター 園芸研究所 プロジェクト研究チームメロングループ 技師
			郷間秀夫	H19. 4	栃木県農業大学校 助教授
			白石俊昌	H19. 4	群馬県東部農業事務所 農業振興課企画調整グループ 企画調整 GL (補佐 (総括))
			池田健太郎	H19. 4	群馬県農業技術センター 生産環境部 植物保護グループ 主任



嶋崎 豊	H19. 3	退職 [埼玉県農林総合研究センター]	加藤公彦	H19. 4	静岡県農林技術研究所 栽培技術部 光技術研究グループ 研究主幹
梅本清作	H19. 4	千葉県農業総合研究センター 病害防除課 課長	伊代住浩幸	H19. 4	静岡県農林技術研究所 生産環境部 バイオフィトン 副主任
畑谷みどり	H19. 4	千葉県農業総合研究センター 病害防除課 技師	芳賀 一	H19. 4	静岡県農林技術研究所 伊豆農業技術センターわさび研究拠点 副主任
久保周子	H19. 4	千葉県千葉農林振興センター 普及指導員	市川 健	H19. 4	静岡県農林技術研究所 果樹研究センター 生産環境 研究主幹
小塚玲子	H19. 4	千葉県農業総合研究センター 生産技術部 病理研究室 研究員	影山智津子	H19. 4	静岡県農林技術研究所 果樹研究センター 生産環境 主任研究員
星 秀男	H19. 4	東京都農林総合研究センター 安全環境科 病害虫管理研究チーム	西島卓也	H19. 4	静岡県農林技術研究所 茶業研究センター 生産環境 主任研究員
嶋田竜太郎	H19. 4	東京都病害虫防除所	土井 誠	H19. 4	静岡県病害虫防除所 主任研究員
堀江博道	H19. 3	退職 [東京都] (東京大学大学院 農学生命科学研究科 植物医科学研究室 教授)	伏見典晃	H19. 4	静岡県産業部経営基盤室 副主任
小林正伸	H19. 6	神奈川県農業技術センター 三浦半島地区事務所 所長	横山泰裕	H19. 4	新潟県農業総合研究所 中山間地農業技術センター センター長
片木新作	H19. 6	神奈川県農業技術センター 北相地区事務所 所長	原澤良栄	H19. 4	新潟県農業総合研究所 作物研究センター 栽培科長
室井義広	H19. 6	神奈川県農業技術センター 普及指導部 主任研究員	堀 武志	H19. 4	新潟県庁経営普及課 主査
布川美紀	H19. 6	神奈川県農業技術センター 三浦半島地区事務所 主任研究員	向島博行	H19. 4	富山県農業技術センター農業試験場 病理昆虫課長
野村 研	H19. 6	神奈川県庁農業振興課 主査	安達直人	H19. 4	石川県農業総合研究センター 資源加工研究部 流通加工グループ
市川和規	H19. 4	山梨県果樹試験場 育種部長	藤田智美	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除グループ 主任
武田和男	H19. 4	長野県南信農業試験場 病害虫土壌肥料部 部長	深谷雅博	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 副部長
小池英彦	H19. 4	長野県農業技術課 専門技術員	福田至朗	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 生物工学グループ 主任研究員
太田光輝	H19. 3	退職 [静岡県]	平野哲司	H19. 4	愛知県農業総合試験場 園芸研究部 花きグループ 主任研究員
牧野孝宏	H19. 3	退職 [静岡県]			
外側正之	H19. 4	静岡県農林技術研究所 生産環境部 植物保護 主任研究員			
鈴木幹彦	H19. 4	静岡県農林技術研究所 生産環境部 植物保護 副主任			
内山 徹	H19. 4	静岡県農林技術研究所 生産環境部 植物保護 技師			

加藤順久	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 病害虫防除グ ループ 主任専門員	栗久宏昭	H19. 4	広島県立総合技術研究所 農 業技術センター 生産環境研 究部 副主任研究員
加藤晋朗	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 病害虫グループ 主任研究員	香口哲行	H19. 4	広島県立総合技術研究所 農 業技術センター 生産環境研 究部 主任研究員
小出隆子	H19. 4	愛知県農業総合試験場 園芸 研究部野菜グループ 主任研 究員	松浦昌平	H19. 4	広島県立総合技術研究所 農 業技術センター 生産環境研 究部 副主任研究員
間下なぎさ	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 環境安全グルー プ 主任	清水佐知子	H19. 4	広島県立総合技術研究所 農 業技術センター 生産環境研 究部 研究員
永井裕史	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 病害虫グループ 主任	井上 興	H19. 4	山口県農林総合技術センター 農業技術部 専門研究員
上田晃久	H19. 4	愛知県農業総合試験場 企画 普及部企画調整グループ 主 任	村本和之	H19. 4	山口県農林総合技術センター 農業技術部 専門研究員
吉田桂子	H19. 4	愛知県農業総合試験場 環境 基盤研究部 病害虫グループ 主任	鍛冶原寛	H19. 4	山口県農林総合技術センター 農業技術部 専門研究員
吉川正巳	H19. 4	京都府農業資源研究センター 主任研究員	岡田知子	H19. 4	山口県農林総合技術センター 農業技術部 研究員
田中 寛	H19. 4	大阪府環境農林水産総合研究 所 農業大学校	衣川 勝	H19. 4	香川県農業試験場 病害虫防 除所 所長
嘉儀 隆	H19. 3	退職 [大阪府]	清水伸一	H19. 4	愛媛県農林水産部 農産園芸 課 係長
草刈眞一	H19. 4	大阪府環境農林水産総合研究 所 食とみどり技術センター 食の安全研究部長	篠崎 毅	H19. 4	愛媛県立果樹試験場 主任研 究員
岡田清嗣	H19. 4	大阪府環境農林水産総合研究 所 食とみどり技術センター 主任研究員	山崎睦子	H19. 4	高知県農業技術センター 主 任研究員
瓦谷光男	H19. 4	大阪府環境農林水産総合研究 所 食とみどり技術センター 主任研究員	高橋尚之	H19. 4	高知県農業技術センター 生 産環境課長
吉本 均	H19. 4	和歌山県農林水産総合技術セ ンター 果樹試験場 うめ研 究所	田代暢哉	H19. 4	佐賀県上場営農センター 研 究部長
伊達寛敬	H19. 4	岡山県農業総合センター 農 業試験場 副場長	挾間 渉	H19. 5	大分県農林水産研究センター センター長
新田浩道	H19. 4	広島県立総合技術研究所 農 業技術センター 果樹研究部 部長	後藤英世	H19. 5	大分県豊肥振興局 生産流通 部 副主幹
			佐藤通浩	H19. 5	大分県東部振興局 生産流通 部 副主幹
			岡本 潤	H19. 5	大分県農林水産研究センター 安全農業研究所 主任研究員
			佐藤善人	H19. 5	大分県南部振興局農山漁村振 興部 副主幹
			長田龍太郎	H19. 4	宮崎県総合農業試験場 生物 工学部 部長

- 牟田辰郎 H19. 3 退職 [鹿児島県] (サンケイ化学株式会社 技術顧問)  
 野島秀伸 H19. 4 鹿児島県農業開発総合センター 企画調整部 普及情報課 農業改良専門技術員  
 尾松直志 H19. 4 鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 病理昆虫研究室 研究専門員  
 大城 篤 H19. 4 沖縄県農業研究センター 名護支所 研究員  
 亀川 藍 H19. 4 沖縄県農業研究センター 病虫管理技術開発班 研究員

## 2. 学位取得者 (課程博士・論文博士)

- 的場百合香 H19. 3 北海道大学・農学研究科 博士 (農学) インゲンマメ苗木枯病に関与する *Pythium* 属菌の分類とその制御に関する研究  
 藤田正平 H19. 3 北海道大学・農学研究科 博士 (農学) アズキ落葉病および茎疫病の抵抗性系統作出に関わる育種学的研究  
 星野 (高田) 裕子 H19. 3 北海道大学・農学研究科 博士 (農学) 土壌くん蒸処理が微生物群集構造に与える影響の分子生物学的解析  
 楊 根華 H19. 3 北海道大学・農学研究科 博士 (農学) Studies on *Rhizoctonia* diseases of field crops and characteristics of causal pathogens in Yunnan Province, China  
 石原岳明 H19. 3 東北大学・農学研究科 博士 (農学) キュウリモザイクウイルス抵抗性に関わる宿主遺伝子の網羅的解析とサリチル酸シグナル経路において機能する EDS5 に関する研究  
 関根健太郎 H19. 3 東北大学・農学研究科 博士 (農学) キュウリモザイクウイルス抵抗性遺伝子 *RCY1* と下流シグナル伝達系の解析

- 夏 志松 H18. 9 東京大学・農学生命科学研究科 博士 (農学) 中国におけるクワ萎縮病の病原とその防除に関する研究  
 山次康幸 H18. 11 東京大学・農学生命科学研究科 博士 (農学) 植物 1 本鎖 RNA ウイルスの遺伝子構造と複製に関わる宿主因子に関する研究  
 奈良部孝 H19. 2 東京大学・農学生命科学研究科 博士 (農学) 日本産ネコブセンチュウの種分布および生物的防除法に関する研究  
 芦澤武人 H19. 3 東京農工大・連合農学研究科 (宇都宮大学) 博士 (農学) マルチラインにおけるイネいもち病の発病抑制機構とシミュレーションモデルによるその解析  
 Al-Zadjali Abudullah Dawood Abudullah H19. 3 東京農工大・連合農学研究科 (宇都宮大学) 博士 (農学) Detection, identification and molecular characterization of phytoplasmas associated with plant diseases in Oman  
 山本幸洋 H19. 3 東京農工大・連合農学研究科 (宇都宮大学) 博士 (農学) 畑土壌における殺菌剤クロロタロニルの動態と生理作用に関する研究  
 長田茂穂 H19. 3 東京農工大学・連合農学研究科 (茨城大学) 博士 (農学) 灰色かび病菌の病原性発現を制御する細胞内情報伝達系に関する研究  
 篠原弘亮 H18.10 東京農業大学 博士 (農学) イネ科作物に生息する細菌群の識別および特性に関する研究  
 廣岡裕吏 H19. 3 東京農業大学・国際農業開発学専攻 博士 (国際農業開発学) Pathology and taxonomy of nectrioid fungi in Japan



- 小林光智衣 H19. 3 名古屋大学・生命農学研究科  
博士（農学）植物の防御応  
答における NADPH オキシ  
ダーゼの活性化機構
- 山溝千尋 H19. 3 名古屋大学・生命農学研究科  
博士（農学）植物の感染応  
答におけるシグナル伝達機構  
の解明と耐病性作物作出への  
応用
- 飯田祐一郎 H19. 3 名古屋大学・生命農学研究科  
博士（農学） *Fusarium oxys-*  
*porum* の孢子形成時に高発現  
する遺伝子の同定と機能解析
- Tri Joko H19. 3 岐阜大学・連合農学研究科  
（静岡大学）博士（農学）  
Molecular biological studies  
on the pathogenicity of soft-rot  
*Erwinia* spp. (軟腐性 *Erwinia*  
属細菌の病原性に関する分子  
生物学的研究)
- 郭 慶元 H19. 4 名城大学・農学研究科 博士  
（農学）イネ諸菌核病を引き  
起こす *Rhizoctonia* および  
*Sclerotium* 属菌の水田における  
越冬・生存と発病に関する研究
- 津田幹雄 H19. 1 京都大学 博士（農学）糸状  
菌防除薬剤（シメコナゾール）  
の植物における移行性と農業  
場面での利用に関する研究
- 笠井智成 H19. 3 岡山大学・自然科学研究科  
博士（農学）エンドウ細胞  
壁における病原菌シグナル認  
識・応答機構の解析—病原菌  
シグナルに応答するアポプラ  
スト Cu/Zn-SOD について—
- 川口 章 H19. 3 岡山大学・自然科学研究科  
博士（農学）Studies on diag-  
nosis and biological control of  
grapevine crown gall
- 原本雅昇 H18. 9 鳥取大学・連合農学研究科  
博士（農学）Studies on the  
biological property of a novel  
fungicide, cyflufenamid
- 山岸大輔 H18. 9 鳥取大学・連合農学研究科  
博士（農学）植物病原菌 *Al-*  
*ternaria alternata* における病原  
性関連因子の分子解析
- 加藤 寛 H19. 3 愛媛大学連合農学研究科（香  
川大学）博士（農学）Molecular  
biological studies on the virulence  
of citrus black rot pathogen（カ  
ンキツ黒腐病菌の病原性に関  
する分子生物学的研究）
- 山崎祐未子 H19. 3 愛媛大学連合農学研究科（香  
川大学）博士（農学）Stud-  
ies on functions and biosynthe-  
sis genes of monoterpene（モ  
ノテルペンの機能とその生合  
成遺伝子に関する研究）
- 草野成夫 H18.12 九州大学・生物資源環境学府  
博士（農学）カンキツ、スモモ  
におけるウイルスおよびウイロ  
イドの診断技術の開発ならび  
に樹体への影響に関する研究
- 富高保弘 H19. 3 鹿児島大学・連合農学系研究  
科（佐賀大学）博士（農学）  
東アジアにおけるカブモザイ  
クウイルスの系統地理学的・  
集団遺伝学的研究
- 田場 聡 H18. 9 琉球大学農学部 博士（農学）  
サツマイモネコブセンチュウ  
の物理的、耕種的および生物  
的防除に関する研究

#### 【本学会活動状況】

##### 1. 部会開催予定

###### (1) 北海道部会

日 時：2007年10月11日（木）、12日（金）

場 所：北方圏センター

（札幌市中央区北3条西7丁目、道庁別館）

連絡先：堀田治邦（北海道立中央農業試験場）

TEL: 0123-89-2001

###### (2) 九州部会

日 時：2007年10月31日（水）、11月1日（木）

場 所：鹿児島県市町村自治会館

（鹿児島市鴨池新町7番4号（県庁前））

連絡先：草場基章（佐賀大学農学部）TEL: 0952-28-8727

## 【共催その他】

(1) 第22回報農会シンポジウム「植物保護ハイビジョ  
ン—2007」—環境に調和した植物防疫(仮題)—

日 時: 2007年9月28日(金) 10:00~17:00

場 所: 「北とびあ」つつじホール(北区王子1-11-1)  
JR京浜東北線・地下鉄南北線; 王子駅(北口)  
徒歩2分

参加費: 5,000円(学生; 1,000円)

## 【人事公募】

(1) 香川大学農学部(植物病理学分野) 教員公募

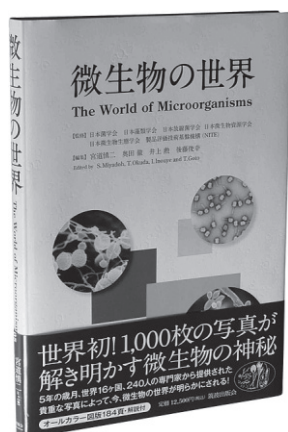
公募人員: 助教 1名(任期3年, 再任1回可)

所 属: 農学部 応用生物科学科

公募内容の詳細は本学会HP並びに香川大学HP;

<http://www.ag.kagawa-u.ac.jp/> を参照

## 【書評】



日本菌学会・日本藻類学会・  
日本放線菌学会・日本微生物  
資源学会・日本微生物生態学  
会・製品評価技術基盤機構  
(NITE) 監修

宮道慎二・奥田徹・井上勲・  
後藤俊幸他 編集: 「微生物の  
世界 The World of Microorgan-  
isms」A4版 214頁, 発行: 2006  
年7月 筑波出版会, 発売元:  
丸善 12,600円(税込み)

本書は, 世界16カ国, 240人の専門家から提供された貴重な写真を, 5年の歳月をかけて編集した総合的な微生物写真集で, 「微生物の宣教師」宮道慎二編集長の熱き思いが結集した研究者必見の名著である。

モノを実際に見ることは分類学の第一歩である。地球上の生物を利用したり, 保護したりする時に生物を識別できなければ手の下しようがない。肉眼で見えない微生物の姿を“見える”ようにした最大の功労者は, 1683年に手製の簡単な顕微鏡で「微細な虫(今日の細菌に相当)」を観察したオランダのレンズ工Leeuwenhockと言っているであろう。それ以後約3世紀余の間に多種多様な精巧な顕微鏡が考案され, 微生物の姿を鮮明にとらえられるようになり, 微生物の形態学, 細胞学が飛躍的に発展してきた。1950年代後半にはR. Y. Steinerらが「The Microbial World」を世に出したが, 宮道博士らの写真集は急速な進歩を遂げた電子, 微分干涉,

位相差, 蛍光顕微鏡などの最新技術の粋を集めた魅力的な写真集で, Steinerらが描けなかった精緻な微細構造を紹介している。この本の嬉しいところは, 肉眼から虫眼鏡・光学顕微鏡の像と電子顕微鏡でしか見えない微細なレベルとをできるだけつなげようとしている点である。心細かに編集された本書を一読すれば, 微生物に関心がなかった読者も想像を超えた美しさにたちまち魅了されるであろう。

本書では, 細菌, 放線菌, カビはもちろんのこと微細藻類やウイルスまでの代表的な微生物の精緻な写真が整然と並び, 魅惑の世界を作っている。各写真には日本語, 英語の解説がついており, 外国人でも容易に理解できるよう配慮されている。

宮道博士が緒論で述べているように, 環境, 食糧, 感染症などの21世紀の地球規模の課題には微生物の利用と制御が不可欠である。我々を取り巻くすべての環境では, 目に見えない微生物が相互に干渉・競合して様々な現象を醸し出している。研究者は自分の研究素材にのみ目を向けて他の微生物との相互作用を往々にして見逃しがちであるが, ここにあげた地球上の課題に取り組むには微生物の存在への心配りが欠かせない。植物病理学領域でも, 環境微生物が関与した植物の抵抗性の話が徐々に増えており, 一つの微生物にだけ目を向けていると意外な落とし穴にはまることを暗示している。その意味でも, 本書を机上の友として日頃から微生物の世界に広く親しむことをお勧めする。大学や研究機関で少なくとも1冊は備えておくべき良書である。

(久能 均)

## 【学会ニュース編集委員コーナー】

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介, 書評, 会員の動静, 学会運営に対するご意見, 会員の関連学会における受賞, プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いいたします。

投稿宛先: 〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ:

加来久敏, 石井英夫, 寺岡 徹, 竹内妙子, 小板橋基夫,  
各委員宛

---

**編集後記**

学会ニュース第 39 号をお送りいたします。本号では宇都宮大での平成 19 年度大会で名誉会員及び永年会員に推挙された方々のご略歴とお話を中心に掲載させていただきました。これらの方々が所属された大学あるいは研究機関で、国内外に向けたご活躍にあらためて敬意を表し、永年にわたる学会への貢献に深く感謝いたします。また、これら新名誉会員・永年会員の方々の日本植物病理学会あるいは植物病理学そのものあり方、海外交流の促進、農薬問題、病害防除などに関する提言や問題提起を真摯に受けとめたいと考えます。特に海外交流、とりわけアジア諸国との交流は研究の国際化や JGPP の IF 取得など学会が抱える大きな問題と深く関わっております。会員皆様のご協力を宜しくお願いいたします。さし当たって、8 月にインドネシアで第 3 回アジア植物病理学会が開催されますが、たくさんの方々が参加されることを期待しています。また、春は人事異動の季節、退職されました方々、長い間お疲れさまでした。また、新しいポストに就かれた方々、これからの益々のご発展を祈念します。

(加来久敏)

---